

今だからできること Case Study

まもなく年度末を迎えますが、思い返せばコロナ禍で始まった2020年度。皆さんは何を思い、どのような1年を過ごしましたか？まだまだ続きそうなwithコロナでの生活、そして学習活動。今年度最後となる今回のコラムでは、JICA国内拠点の研修やセミナーで実施された、「今だからこそ」とも言える企画を、ケーススタディとして紹介します。そして、その裏にある担当者の想いも、併せてご覧ください！

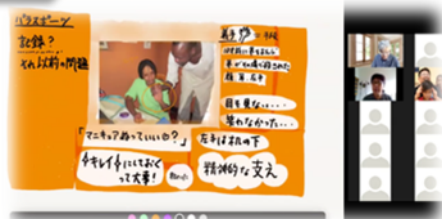
JICA横浜とJICA東京の研修担当者に、本年度に実施した研修・セミナーの中から、国内リソースを活用した企画について、そのねらいや、参加した方からの感想をお聞きしました。

Case 1 外国にルーツを持つ子どもの多い地区での視察 (JICA横浜)

JICA横浜の2020年度教師国内研修では、テーマを「多文化共生」として、計8回の研修を実施しています。この中で、身近な多文化共生を知るフィールドワークとして、外国にルーツを持つ子どもの多い横浜市鶴見地区での視察を行いました。この地域にある日系ブラジル人の方が経営するお店や、鶴見国際交流ラウンジなどを訪問し、鶴見地区で暮らす方の実体験や、「多文化共生のまちづくり」を支援する方のお話から、参加者は多文化共生や移民について考え、理解を深めました。この研修では、他にもさまざまなプログラムを実施し、これらの研修で得たことを踏まえて、参加者はワークショップづくりにも取り組んでいます。(詳しいレポートは[こちら](#))

Case 2 さまざまなゲストを招いた双方向型のオンラインセミナー (JICA横浜)

中学生から大人まで、参加者全員が一緒になって考え、意見交換ができるオンラインセミナー「ボードレスカフEfromカナガワ」を、かながわ開発教育センターと共催で実施しています。毎回、国際協力やSDGsに関わるゲストをお招きし、ゲストは数枚の写真を糸口に、さまざまなエピソードを話していきます。また、その内容はグラフィックレコーディングにして、見える化していきます。参加者は4~5人のグループに分かれて感想や疑問点を出し合い、さらにそれを全体で共有し、双方向でやりとりを行います。参加者からは「ゲストの生き方に刺激を受けるだけでなく、それをグループで話し合う時間がよかった。」との声があがっています。



第1回目のゲスト、ルダシングワ真美さんのお話のグラフィックレコーディング

Case 3 JICA東北と連携した、宮城県丸森町のバーチャルツアー (JICA東京)

2020年度教師海外研修の派遣予定国だったザンビア。この代替研修では、ザンビアの草の根技術協力をしている宮城県丸森町のバーチャルツアーを、JICA東北と連携し実施しました。ツアーの中では、丸森町の技術協力活動や、これらの国際協力活動に携わる人々の思いを知ることができました。(詳しいレポートは[こちら](#))
参加者からは、「ザンビアの農家を助けてあげようというスタンスではなく、丸森町に伝わる在来農法を伝えて一緒に考え、それによって丸森町も元気になっていることがよくわかった。」「アフリカ人ではなく“ザンビアの〇〇さん”という付き合いを、町ぐるみでできていることに驚いた。」といった感想がありました。

Case 4 岐阜県の国際協力推進員と連携した、企業へのオンラインインタビュー (JICA東京)

2020年度教師海外研修のもうひとつの派遣予定国だったパラグアイは、日系人や日系社会との関係がとて深く、それを抜きにして語ることはできません。JICA東京では、この代替研修のプログラムとして、JICA中部の岐阜県国際協力推進員と協力し、岐阜県美濃加茂市にある株式会社ギアリンクスの社長にオンラインインタビューを実施しました。この会社は、東日本大震災後に、パラグアイの日系農家から寄付された大豆を輸入して豆腐に変え、被災地に届けた企業です。「故国を助けたい」というパラグアイの日系人の方々の想いを、被災地につないだ民間企業。その志を知る機会になりました。

Case 5 JICA在外事務所(パレスチナ・ザンビア)と連携したオンライン授業 (JICA東京)

教師海外研修OB会からの要望を受け、全国一斉休校期間中であつた2020年4~5月に、パレスチナとザンビアのJICA在外事務所とのオンライン授業を行いました。OB会との話し合いを重ね、まずは、オンライン授業をすることが可能な学校で実施しました。オンライン授業のための設備が整っていない学校も多くあつたため、授業の動画を編集し提供することで、教材として活用していただきました。授業を受けた生徒さんからは「コロナ禍は日本だけの問題ではなく、みんながつらい思いをしている。だからこそ力を合わせて乗り切ることが大切だとわかった。」「〇〇君の国のことを、もっと知りたくなった。」などの感想が聞かれました。(詳しいレポートは[こちら](#))



パレスチナ事務所の所員とご家族も参加し、意見交換を行いました。

今回、活動を紹介してくださったJICA横浜の中野さん、JICA東京の古賀さんに、コロナ禍における学びや研修について、担当者としての想いを伺いました。



JICA横浜（市民参加協力課）中野さん

コロナ禍により、大人数を集めた対面でのセミナーや、海外研修が実施できなくなりました。その状況下で、「学校の先生や子どもたちに、どのような価値を提供できるだろうか」ということを、関係者と検討し、今できる形の研修やセミナーを開催してきました。

昨年度まで実施していた教師海外研修の事前事後研修では、座学だけでなく、国内でもフィールドワークを実施したり、グループでのワークショップ作りを行っていました。そのため、代替の「教師国内研修」でも、**その中で得たノウハウを活かし、国内のみの研修でも、JICAとしてできることを先生方に提供し、それがひいては子どもたちにとって意味のある内容につながれば、**という想いで、今年度の研修をデザインしました。

オンラインセミナー「ボーダレスカフェ」については、共催のかながわ開発教育センターと意見交換を行う中で、「**コロナ禍で海外と直接つながる機会は減ったが、オンラインなら可能なのではないか？**」という話が出発点になりました。そして、若い人たちが海外経験のある人に触れることを通して、**自分自身の身の回りに目を向けたり、生き方を考えるきっかけにして欲しい、**という想いで実施しています。

来年度もコロナ禍は続くと思いますので、今年度のような取り組みを継続していければと思います。さらに、**人と人がつながる場づくりも大切に考えています。**このような状況下ではありますが、**オンラインを活用して、先生同士や子ども同士がつながる場づくりにも、積極的に取り組みたいと考えています。**



JICA東京（市民参加協力第一課）古賀さん

コロナ禍は、世界中の格差や分断を進めてしまった側面がありますが、「**今できること」「今だからこそできること**」を見つけて、**教員や児童生徒の皆さんに、地球規模の課題に立ち向かう気持ちや、連帯を感じてほしいと願っていました。**JICA東京では従来より、過去に教師海外研修に参加した方々と、SNSなどを活用したつながりづくりを進めてきていましたが、**2020年度はこの協力を深めることにもなりました。**

2020年4～5月に行ったパレスチナとザンビアの在外事務所とのオンライン授業では、ローカルスタッフのお子さんの声も日本の教室につながることができました。日本の先生方は、「**自分たちだけが苦しいのではない」「日本を含むそれぞれの国に、課題もあれば強みもある**」という気付きを得る時間となりました。またその動画をOB会の方々が編集して共有財産としたことで、**オンライン授業ができなかった学校でも活用することができました。**教師海外研修の代替国内研修では、**国内のアクターに焦点を当て、多文化共生や日系社会をテーマとし、ソーシャルビジネス界からのゲストにオンラインで登壇していただいたり、宮城県丸森町の方にバーチャルツアーを作成していただきました。**その結果、参加された先生方には「**すぐそばにある国際化」「どこにいてもできる国際協力**」を考えてもらう機会となり、それを活かした素晴らしい授業が、各参加者の学校で実践されています。

また、通常は教師海外研修への参加は1人1回のみですが、今回は**過去に参加した方にも入っていただいたことで、とても良い学びの循環を作る結果となりました。**

2020年度は、新しいことを生み出していかなければならない苦しい年でしたが、振り返れば、**得るものもとても大きかったと思っています。**



▼国際理解教育・開発教育に活用できるJICAのリソース・国内拠点の情報はこちら

[JICA教材](#) / [国際協力出前講座](#) / [実践事例・学習指導案](#) / [国内のJICA拠点](#) / [各地のJICA窓口\(国際協力推進員\)](#)

国内の他の地域との協働や、オンラインでいろんな人の生き方や世界に触れたり、あるいは身近なところから世界の課題を体感できるような取り組みなど、JICA国内拠点では、コロナ禍でも学びを止めないための工夫を凝らした、さまざまな研修やセミナーが行われています。マネできそうなものがあれば、参考に見てみてくださいね。そして、「**できないこと**」を見てしまいがちな今ですが、「**今だからできること**」を、ぜひJICAと一緒に見つけていきましょう！